

総括

平成16年11月1日に明野村、須玉町、高根町、長坂町、大泉村、白州町、武川村の7町村が合併し、北杜市が誕生した。更に、平成18年3月15日に小淵沢町の編入合併により、新しい北杜市が誕生した。北杜市は、山梨県の北西部に位置し、県下最大の面積を有する。八ヶ岳連峰や南アルプス等の山々、豊富な湧水といった自然環境にも恵まれていることから、多くの観光地がある。また、その湧水を利用した大企業の工場も多数存在する。こうした中で、市内を流れる多くの河川は清流であるものの、こういった因子の影響を受けるおそれがあり、水質調査を継続的に実施し監視しているところである。

北杜市誕生後から起算すると、今回で第六回目となる河川水質調査となる。特異的な事柄とすれば、まず須玉増富方面から自然由来と思われるひ素の検出が挙げられる。特に須玉No. 2とNo. 11で環境基準を超過する値で検出されている。同じ塩川水系の下流域である須玉No. 10や明野No. 7でも検出されており、おそらくこれに起因していると思われる。ただし下流域では環境基準は満たしていた。また、今年度新たに本谷川の上流域に当たる須玉No. 12を追加し、夏季冬季でひ素を測定したが不検出であったため、本谷川におけるひ素の持込みは、この区間内のある増富温泉周辺部にあると思われる。

次に事業所や生活排水などの影響が出やすいと思われる地点で人の健康に関する26項目の検査を行ったが、有害物質などはほとんど検出されておらず、良好な結果だったと思われる。

河川環境基準の項目では、pHが類型外となったのはわずかに1地点で、夏季に水中植物等による光合成の影響があったと思われるため、問題ないように思えた。BODもほとんどがA～B類型相当の値を示しており、SSの夏季冬季の平均値は全地点でAA類型であった。ただし、白州のNo. 1の冬季のBODは河川環境基準E類型相当の値となっており、この地点は年度によって突出して高くなる傾向があり、上流域から有機物を含む水の流入があると思われるため、もう少し密な監視が必要と思われる。大腸菌群数も、一般的には夏季より冬季のほうが微生物の活動が低下するため低い数値となり、ほとんどの地点でその傾向にあるが、白州No. 1については逆転しているため、排水等の影響が想定される。

その他、全窒素、全りん、陰イオン界面活性剤、糞便性大腸菌群数などの項目も、例年並みの推移をしていることから、外的因子の影響はあまり受けていないように感じた。

本調査結果からも、北杜市は非常に良好な水質である河川が多く、今後もこの水質を維持し続けるために、本報告内容がその一助となれば幸いと考える。